日本音響学会誌 63 巻 12 号（2007），p. 754

連載企画──音の博物館──

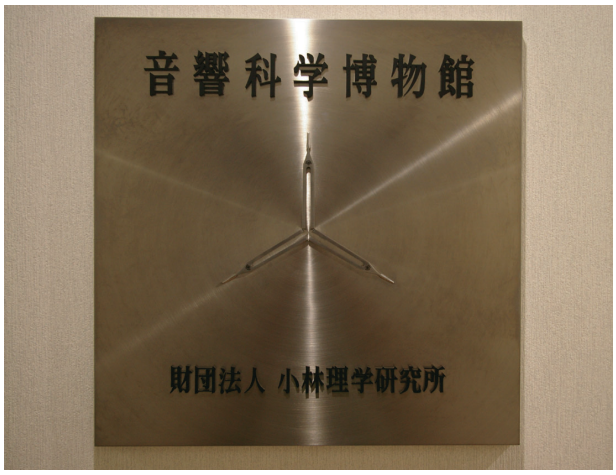
(財)小林理学研究所：音響科学博物館*

山 下 充 康（小林理学研究所理事長）**

財団法人小林理学研究所は昭和 15 年（1940 年），東京都下北多摩郡国分寺町（現在地，国分寺市東元町）に民間の物理科学研究所として誕生しました。昭和 14 年には第二次世界大戦が勃発し，昭和 16 年には日本の真珠湾攻撃で太平洋戦争に突入します。太平洋戦争は昭和 20 年 8 月に終戦を迎えますが，物資不足の戦時中，混乱の終戦後を研究の灯火を消すことなく守り続けた諸先輩の科学研究に対する情熱を想うと貴重な遺産を引き継いだ我々は身の引き締まる思いがいたします。65 年を越す歴史の中で培われた物理科学にかかる研究成果は多方面にわたりますが，とりわけ，音響科学については国内外から高い評価を得ているところです。ちなみに小林理研と時期を同じくして日本音響学会が創設されました。当時の小林理研の研究者たちが音響学会の創設に大きく貢献しました。

音響科学はエレクトロニクスの発達と強く関係しています。一般に知られた音響機器に録音再生機があります。機械的な録音再生器（蓄音器）から近年のディジタル音楽メディアまでめまぐるしい発展を遂げています。音響研究に不可欠なマイクロホンやスピーカ，録音装置や周波数分析装置は今でこそ手近な存在になっていますが，小林理研の黎明期にはたいそうな苦労があったようです。今では音響学の教科書でしか見ることのできないレーリー盤，ヘルムホルツの周波数分析用共鳴器，実験用音源のサイレン，エジソンの蝋管式蓄音器，様々な計算機，電磁オッシロスコープ…。これらを収集展示しました。

研究者の性でしょうか，新しい物が好きで，古い実験道具には興味を示さないらしく，倉庫の片隅に一世を風靡したであろう「名機」が無造作に放置されていました。これを集めて展示したのが「音響科学博物館」。真空管登場以前の「バルクハウゼン」の騒音計は一見に値します。音響科学を中心にした様々な実験器具が展示されています。お訪ねいただければ幸いです。なお，展示品については「小林理研ニュース」に「骨董品シリーズ」として連載させていただいております。下記のホームページからもご覧いただくことができます。（URL: http://www.kobayasi-riken.or.jp/）。ご来訪をお待ちしています。



図–1　「音響科学博物館」の看板

図–2　博物館の室内

* Kobayasi Institute of Physical Research Museum for the Science of Sound.

** Mitsuyasu Yamashita (Kobayasi Institute of Physical Research, Kokubunji, 185–0022)